

「第三十七回庭野平和賞」贈呈式 名誉会長挨拶

庭野平和財団 名誉会長 庭野日鏡

「第三十七回庭野平和賞」の贈呈式に際し、挨拶を申し上げます。

本日は、オンラインでの贈呈式にも関わらず、大勢の皆さまのご参加を頂き、あつく御礼申し上げます。

今年度の「庭野平和賞」を、韓国の在家仏教教団・「浄土会」の創立者である法輪（ポンニョン）師にお贈りできますことは、大変光栄なことでございます。選考にあたられたスーザン・ヘイワード委員長はじめ、庭野平和賞委員会の皆さまに深く敬意を表したいと存じます。

只今、スーザン・ヘイワード委員長さまから、贈呈理由をお話しして頂きましたが、ポンニョン師は、一人ひとりの心の安寧を養う対機説法を続けられ、韓国では、「真の人生の助言者」と呼ばれるほどの有名人でございます。

「慈悲の実践によって、世界全体の幸福に貢献する」との理念に基づいて、長年にわたり、国内外で福祉や人道支援、環境保護の活動を展開してこられました。諸宗教者と共に、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の人々への救援活動にも尽力しておられます。

ポンニョン師が十代から二十代の頃、韓国は、朴正熙（パク・チョンヒ）大統領による、独裁政権の時代であったと言われております。ポンニョン師は、十六歳で出家されていますが、高校卒業後は、大学には進学されず、農民運動や仏教教育活動に取り組みました。

一九七九年には、社会運動団体に資金を送ったとの嫌疑で逮捕され、拷問まで受けられたそうです。

当時のことを振り返り、ポンニョン師は、次のように語っておられます。

「以前、私は社会正義のために戦う民主主義の闘士でした。独裁者を憎み、正義の実現のためには犠牲になる覚悟で活動していましたが、他人に対する不平を募らせることが多くて、いつも心は暗かったのです。

しかし、真に仏法に目覚め、世の中をあるがままに見ることができるようになると、誰が正しくて、誰が間違っているというのではなく、ただお互いに見解が異なるのだということに気づきました。

独裁者や軍部、帝国主義者、排他的な宗教団体や利己的な集団……。彼らは、打倒すべき敵ではなく、私と見解が異なる人、集団でした。彼らも、彼らの立場では、最善と考えることをしているのが分かったのです」と。

ご自身にとって、人生を左右するような大きな目覚めであったことが、このお言葉からも、うかがうことができます。

仏教では、「十界互具」と言って、人間は誰でも、仏のような心から、地獄の鬼のような心まで、同時に具えていると教えています。

独裁的であったり、排他的、利己的な態度をとったりすることは、本来、自分自身に内在する課題であり、決して他人事ではありません。

しかし一方で、人間は誰もが、生まれながらにして仏の悟り、真理を認識する能力を持ち、仏となる種子、つまり仏性を宿していると教えられています。

このことを深く自覚しますと、目の前の現象は、以前とは大きく違って見えてくるのであります。

ポンニユン師の素晴らしいところは、そうしたご自身の目覚めを、即座に実行に移していくことにあると思います。

「社会運動と仏教が一つになる時が来た」と確信したポンニユン師は、一九八八年、三十五歳の若さで「浄土会」を創立されます。

そして、「浄土会」内に、NGOなどを設立し、北朝鮮への人道支援活動、インドの不可触民などへの支援、環境保全活動などを展開されるのであります。

ポンニユン師の行動力を象徴する、こんなエピソードがあります。

巡礼のために初めてインドに訪れた時、赤ちゃんを抱えた女性が「ミルクを買うために六十ルピーを恵んで欲しい」と近づいてきたそうです。

ツアーガイドから「物乞いをする人に金を渡してはいけない」と事前に注意されていたため、断ったのですが、あとで六十ルピーがいかに小額かを知って、深く後悔されたといえます。

六十ルピーで命をつなぐことができるなら、差し出そう。二度とこういう拒否はしまい、とポンニユン師は、固く心に決められました。このことが、インドにおける小学校、中学校や病院の設立、給食の提供、衛生教育の実施などにつながっていったのであります。

目の前の現象を通して、自らを内省し、気づきを得て、それを即実行に結びつけるところが、ポンニユン師の真骨頂と申せましょう。

言うまでもなく、いま私たちは、数々の課題の只中におります。その根本原因を、ポンニユン師は、「貪欲・怒り・愚痴」の三毒にあると分析されています。その三毒を正当化してきた社会構造によって、現代の危機的な状況がもたらされたと言われるのです。

飢えや貧困、無教育、人権侵害などの背景には、紛争や戦争の存在が横たわっています。争いの原因となる根強い敵対心を解決することなくして、人間の尊厳を守ることはできないということでもあります。

儒教の『大学』という書物に、「修身齐家治国平天下」という一節があります。心を正し、身を修めることが、家庭を斉え、国を治め、世界を平和にすることにつながるという意味です。

言い換えるならば、心を正し、身を修めることなくしては、家庭の平和も、国の平和も、世界の平和もあり得ないということでもあります。

こうした原点を深く見詰め、一人ひとりの心の修養と同時に、広く社会へと運動を広げていくことによって、自己変革と社会変革が同時に起こる——それが、ポンニユン師の確信であります。

今後、私たちが、新しい文明を創造していくことについて、ポンニユン師は、大変印象的なことを述べておられます。

「『自己犠牲』によってなされるのではなく、それをつくるプロセスそのものが喜びでなければいけません。目覚めた心で、いまの社会構造や価値観に迎合せずに生きていく私たちが、誰よりも幸せなら、自ずと私たちは多数派になっていくことでしょう。ですから修行者は、幸せでなければいけません。

苦しんでいる人に手を差し伸べ、平和な世界を築くことに力を尽くし、自然環境に心を配りながら生きていく人々が、より幸せで自由であれば、必ずや新しい文明が芽生え、育っていくことでしょう」

この言葉を、皆さまと共にかみしめたいと思います。

本日は、直接、お会いすることは叶いませんが、ご著書などを通して、理解を深めさせて頂きますと、ポンニユン師が、大変明るく、優しく、温かいお人柄であることが伝わってまいります。いつかお会いできる日を楽しみにしております。

本日の贈呈式を契機として、ポンニユン師の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございます。